

り、問題自体が見失なわれてしまう弊がないではない。

初学者用のテキストとして書かれた第1章の前半は別として、本書の残りの部分ではそれぞれの理論展開の発端となった事実や問題提起についてもっと具体的な解説が欲しいと思う。理論の整理のみでは初学者にとってはなぜそのような理論展開が必要なのか分りかねるであろう。ひるがえって日本の現実を眺めるとき、最近顕著になった貿易収支の大幅黒字傾向の下で、日本の国際経済政策は大きな転換を迫られており、国際経済学者の発言も求められている。本書にはそのような問題意識は希薄である。しかし本書で扱われている諸理論はこのような日本の現実と無関係ではない。貿易偏向論は明治以降、否、第2次大戦後の日本の経済成長が貿易に及ぼした影響をいかに説明できるのか。資本移動の理論において今日解明が求められているのは多国籍企業による直接投資の行動である。関税も単に輸入品の国内価格を高める効果のみならず、カナダやオーストラリアの研究者によって試みられているような産業組織に与える影響にもっと注目しなければならないであろう。理論を真に現実理解の有効な用具とするためには、きれいごとの理論整理に終らずに、たとえば世界の各国に見られる工業保護政策を説明するためにジョンソンが導入した工業選好仮説のような大胆な理論化が必要であろう。著者自身の問題提起と積極的展開を期待したい。【山沢逸平】

水田 洋

### 『アダム・スミス研究』

未来社 1968.10 428, 101 ページ

これは書評を書きにくい書物である。おまけにすでにいくつかの書評がでており、著者もすでに反論めいたものを書いてしまっている。このうえまた、あえて何をかいわんやという気もするのだけれども、しかし、このごろ17世紀から18世紀の思想史へほんの少し関心を移動させつつあるわたくしにとって、大いに関心をそそられる問題もないわけではない。そういう点に焦点をしばって若干の感想をのべてみたい。

山崎怜氏の表現によると、著者はスミスという巨峰の山麓やベースキャンプをぐるぐるまわってばかりいて、なかなか山頂をきわめないといわれるが、わたくしはまだスミス山のふもとへも到達していない。その手前にヒューム山もあり、スコットランド歴史学派という山脈や

道徳感学派という山脈もあって、一生かかってもスミス山までゆけるのかどうか分からないという状況にある。そういうときに、はるか先の方から、こっちの道をくるとスミス山だぞと声をかけてくれた先達がいる。この書物はそういう感じの本である。だからわたくしの感想もスミスそのものよりも、もっと手前のところに集中せざるをえない。

そのスミスへの道をどう見きわめるのかがひとつの問題である。著者も「ロックからスミスまで、すなわち主として18世紀前半のイギリス思想史は、その前後にくらべて、開拓がはるかにおくれている」(224ページ)ということ認めつつ、スコットランド学派とアイアランド出身の何人かの思想家と理神論者、自由思想家とそのほか数名の名をあげて、「この時期のイギリス思想史の、輪郭はほぼ見当がつく」(224ページ)といっているが、わたくしにはまだ見当がついていない。大きな流れとしては、著者もいうように、利己心の哲学=功利主義と道徳感の思想との二つがあることはたしかであろうが、これはかなり錯綜しているようだし、理神論や自由思想家をこの二つの流れとどう関係づけるのかもよくわからない。たとえば理神論は宗教思想としてはかなりラディカルなものだしじじつトランドなどはそのために迫害を受けているのだが、シャーフツペリではそれがどうして秩序の思想と結びついてしまうのであろうか。あるいは、「1688年以後英語で書かれたもっとも深刻な社会批評の多くがアイアランド生まれの人の手による」というクリストファー・ヒルの指摘は、先の大きな二つの流れとどういう関係において考えるべきなのか。18世紀前半のイギリス思想史についてのこういうたぐいの疑問をあげてゆけば、まだいくらでもあるけれども、そういう諸潮流が結局はすべてスミスへ流れこむのかどうかということが、わたくしのいちばん大きな疑問なのである。ちょうどロックが17世紀イギリスの諸思想の一部をきり捨てることによって17世紀を綜括しえたのと同じように、スミスもまた何かをきり捨てることによって18世紀を綜括しえたように、わたくしには思われてならないのだが、もしそうだとすれば、スミスによってきり捨てられたものは何であったのかを、わたくしは知りたいのである。すべての道はスミスへつうずるのではなく、この道はスミスへつうじないというものがありはしないか。それがえがかれることによって、スミス山の輪郭はいっそうはっきりとすることであろう。

スコットランド歴史学派というものも、わたくしにとってはなかなかの難物である。この書物は、ページ数に

して全体の約半分がスミスの伝記、残りの半分がスコットランド歴史学派、あと半分が日本と世界におけるスミス研究となっていて、見方を変えればスミスを中心としたスコットランド歴史学派研究とも呼びうるものとなっている。スコットランド歴史学派にかんする部分のなかには、ジョン・ローガン、フランシス・ハチスン、エンサイクロペディア・ブリタニカ初版にかんするユニークなモノグラフィもふくまれていて、これは国際的にも開拓者的な研究であるといつてよいであろうが、全体としてのスコットランド歴史学派をどうとらえるのかという問題は、まだ残るように思われる。これを史的唯物論の先駆として評価する見解がイギリス本国では有力であるらしいが、著者は「この先駆性だけをとりだして強調することは、スコットランド歴史学派の全体像をえがく場合には……誤解をまねく可能性がある」(249ページ)といつており、その点についてはわたくしもまったく同感である。そうではなくて、この学派が「基本的にブルジョア的進化の立場に身をおいた」(249ページ)ということも、わたくしは賛成なのだけれども、そうするとこの学派の文明批判や、この学派の一部にみられた政治的急進性をどうみるのかという問題がでてくるであろう。そのあたりのところで、著者も指摘するような、たとえばスミスとファーガソンの違いなどがでてくるのだが、それはスコットランド歴史学派が資本主義の先端にではなく、むしろ後進地帯にいて、急激な、しかも輸入品である資本主義的發展を観察していたのに対し、スミスはもっと大きな目でブルジョア的發展を展望していたからだ、という説明で、説明しきれるのであろうか。わたくし自身の積極的な意見はまだまとまっていないので、こういう疑問をただ疑問としてだけ提出しておくにとどめなければならぬのであるが、さらにこの問題に関連して、著者が提起している「ミラーにおける政治的急進主義と経済学的後退(スミスからの)との並存という問題」(261ページ)を、たんにスコットランド歴史学派だけの問題としてではなく、ひっくり返せばスミスにもあてはまる問題として、あるいはもっとひろく経済学一般の問題として、考え直してみる必要がありはしないであろうか。わたくしもかつて、ペティにかんして同じような問題につきあたったことがあるので(拙著『イギリス市民革命史』273ページ参照)、この問題をスミスに即しつつどう考えるのかということ、著者にもっときいてみたかったという気がしている。

この問題とも関係することだが、スミスとスコットランドという問題がもうひとつあるであろう。スミスの思

想の背景としてスコットランドの歴史的社会的状況の分析をとりいれたことは、この書物の大きな功績のひとつだと思ふが、スミスにおけるスコットランド的性格と全イギリス的視野との関係はどうなのかという問題はいぜんとして残るように思われる。著者は、一方ではスコットランド歴史学派との対比においてはスミスの全イギリス的視野を強調し、他方、ブルジョア・ラディカルズやタッカーとの比較ではスミスのスコットランド的性格を重視するという微妙な位置づけを与えている(42ページ)のだが、著者自身も「むしろひとつの謎」(34ページ)といつているスコットランドの経済的發展のコースが、もし著者のいうように、「貿易→工業→農業」という、スミスのシェーマとは逆のものだったとするなら、スコットランドはスミスにとってむしろ「反面教師」であったのではなかろうか。スミスにおけるスコットランド的性格というものを、こういう意味に理解してよいのかどうか、それとも、スミスのシェーマと逆であるにもかかわらず、スコットランドを急速に征服してゆく資本主義の力をスミスが見ぬきえたという意味に理解すべきなのか、こういう理解の仕方いかんによって、スミスとスコットランドという問題に対する答も異なってくるであろう。

著者がもしスミス山の周辺をまわっているというのなら、わたくしのこの書評はさらにそのまた周辺をまわってしまったことになったかも知れない。したがってこういう形での書評では、この書物のもっている高さは十分に測定しえないであろう。しかしこのことは決してわたくしがこの書物を低く評価しているということのあらわれなのではなく、むしろまったくその逆なのである。昭和29年にこの書物の前身である『アダム・スミス研究入門』がだされているが、その改訂版である本書は分量だけではかっても倍近くになっており、つけ加えられた論稿や加筆のひとつひとつに著者の長年の研究の蓄積がこめられていることを感ずるのは、わたくしひとりではないであろう。とりわけ巻末の書誌は、いつもながらの丹念さをもってまとめあげられた綿密周到な文献研究であつて、それだけでもみごとな業績といつてよいものである。かりにこの書誌のなかから、スミスの著作の邦訳と日本語のスミス研究をひろいあげて年代順にならべてみるとすれば、それだけで日本におけるスミス研究史のアウトラインがうかびあがることであろう。そしておそらくは著者は、この文献目録をつくりながら、そのひとつひとつに著者自身の30年にわたるであろうスミス研究の軌跡をふりかえる思いをこめていたのではなかろうか。



これはそういう一種の個人的な感慨さえもが感じとられる書物なのである。

【浜林正夫】

長 砂 実

『社会主義経済法則論』

青木書店 1969.12 312 ページ

本書は、著者が大学院在学中から追求し、ここ10年来発表してきた「社会主義経済法則論」にかんする諸論考をもとにして編まれたものであり、この問題について系統的な論考を試みた、おそらくわが国で最初の本格的な労作といつてよいだろう。

こんにち、われわれが社会主義経済学と呼んでいるものは、今次大戦前までは唯一の社会主義国であったソ連邦において、資本主義から社会主義への過渡期がおわり、社会主義的生産関係が支配的になった1930年代の中ごろになって、その体系化の試みがはじまった。その後、多くの論争を経て、1954年に初版が出た『経済学教科書』(ソ連邦科学アカデミー経済学研究所編著)の「社会主義生産様式」篇(邦訳の第三、第四分冊の部分)のなかに、いちおうの理論体系が示された。しかし、周知のように、ソ連共産党第20回大会(1956年)におけるスターリン批判を契機として、ソ連経済学界では、社会主義経済学のさまざまな理論問題をめぐって「経済学のルネッサンス」と評されるほどのなばなしい論争がくりひろげられた。また実践面においては、ソ連邦をはじめ一連の社会主義諸国で利潤方式・物質的関心を重視する経済改革が実施されるにいたり、社会主義社会の過渡的性格、経済改革の評価の問題、社会主義・共産主義建設の国際的経験の問題などをめぐって、中ソ両国を中心に国際的論争が展開された。

以上に指摘した、スターリン批判以後、社会主義諸国で提起された理論上・実践上の諸問題は、これまで社会主義経済学と呼ばれてきたものを改めて根底から問いなおすことを、われわれ社会主義経済研究者に迫っている。著者は、このような問題追求は社会主義国の経済学者にのみ任せておけばよいものではなく、われわれのような外国の研究者でも独自の理論的寄与をなすという信念のもとに、ここ十数年来、ソ連経済学界で展開されてきた数々の論争のあとを克明に辿り、個々の論点について徹底的な批判・検討をくわえると同時に、これらの諸論点について著者独自の積極的見解を提示している。こ

の点に本書の大きな特色がある。本書はきわめて polemical な性格を帯びており、叙述は、複雑な理論展開を追っているもので、本書の全体にわたって著者の考え方を追うことはできないし、一部分のみに焦点をあてて論及するのも、適当ではないので、全体についての簡単な紹介にとどまらざるをえない点を予めことわっておきたい。

本書の構成はつぎのとおりである。

第一章 社会主義経済法則論の発展の諸問題。第二章 現代社会主義経済法則論の一般的諸問題。第三章 社会・共産主義の個々の経済法則の諸問題。第四章 経済改革における経済法則の「利用」の諸問題。

第一章は本書の序章的部分をなしており、前半(第一節)では、著者はマルクス、エンゲルスの経済法則論、経済法則と経済学的範疇との関係、マルクス経済学の諸法則の体系などについてマルクス主義古典のなかから整理して示すことによって、著者が本書において全面的に追求しようとしている主題(社会主義経済法則論)にかんする批判的検討のための方法的立場を明確にしている。第一章の後半(第二節)では、著者は、社会主義経済法則論の発展を、(1)マルクス、エンゲルスの段階、(2)レーニンの段階、(3)1920年代のソ連経済学、(4)30年~40年代の社会主義経済学確立準備期、(5)50年代以降の社会主義経済学確立期にわけて、論点を整理して示し、20年代以降のソ連経済学史の批判的総括をおこなっている。

第二章では、著者は、社会主義の経済法則と経済学的範疇、経済法則と経済的合法則性との区別と関連、経済法則と経済的矛盾の関係や社会主義の経済法則の客観的性格の問題、歴史的 성격の問題、社会主義の経済法則の作用性格と社会主義国家の経済政策との関係などについてソ連経済学界にみられる多様な諸見解について問題点を指摘し、これらの問題をどのように考えるのが正しいかについて著者自身の積極的見解を示している。

第二章第二節では、近年、ソ連経済学界で社会主義・共産主義経済学体系化の新しい試みがさまざまな形でおこなわれているが、そのさい、マルクスの『資本論』が商品から始まっているのにたいして、社会主義・共産主義の経済学体系はいかなる範疇から始めるべきかをめぐって展開されているいわゆる範疇論争を紹介し、「生産手段の社会的所有」説、「社会的生産の計画化」説、「生産の集団性」説、「社会的生産物」説についてコメントをおこない、著者自身は、「広義の経済学の方法論に立脚して、社会・共産主義経済学の場合も、広義の社会的所有の諸関係の本質的諸特徴、諸矛盾がもっとも一般的かつ抽象的に表現されている「社会的生産物」が端緒的